茨木市立　平田中学校　茨木っ子グローイングアップ計画

平成３０年１０月作成

1　３年間の計画

	目 標	平成２９年度（２０１７年度）	平成３０年度（２０１８年度）	平成３１年度（２０１９年度）
中学校ブロック保幼小中連携	自己肯定感と思いやりのある子どもたちを育てる	○ 連携担当者会議の開催 ・各パートの会議の設定 ○ 合同授業研の開催と交流 ・１２月６日ブロック研実施 ・各幼小中の研究授業に積極的に参加する。（連携通信発行） ○ 学校事務の共同作業 ○ 連携教員による取組み ・玉島小の授業参観と出前授業	◎ ２９年度の取組みの継続 ○ 保幼小中連携会議の開催 ・学びシンポジウム分科会の企画 ・各パートの会議の活性化 ・連携カリキュラムの見直し ○ 合同授業研の開催と交流 ・１２月５日平田中ブロック ○ 連携教員による取組み ・玉島小の授業参観と出前授業	◎ ３０年度の取組みの継続 ○ 連携担当者会議の開催 ・外国語教育会議の確立 ○ 合同授業研の開催と交流 ・連携カリキュラムの再確認 ・交換授業の推進と実践 ○ 連携教員による取組み ・家庭学習の保護者向け講演会の実施（保幼小中対象）
確かな学力の育成	「生徒の学ぶ意欲を高める指導の工夫」	○ 目標に準拠した評価の研究 ○ 学力向上のための取組み ・基礎学力の定着のために ・既習事項の定着のために ・授業方法の工夫と改善 ・学校全体としての取組み ○ 小中連携の取組み ・小中の段差解消 ・連携通信の活用	◎ ２９年度の取組みの継続 ○ 学力向上のための取組み ・基礎学力の定着のために ☞ 家庭学習の方法の研究 ・授業方法の工夫と改善 ☞ グループ学習の検証等 ○ 小中連携の取組み ・小中の段差解消 ☞ 宿題の出し方の共通化	◎ ３０年度の取組みの継続 ○ 学力向上のための取組み ・基礎学力の定着のために ☞ 家庭学習の方法の研究 ・授業方法の工夫と改善 ☞ グループ学習の検証等 ○ 小中連携の取組み ・小中の段差解消 ☞ 家庭学習の大切さの啓発
豊かな人間性を育む	道徳教育の推進	○ 個性や立場の違いを尊重する、寛容の心を持つ。 ○ 役割と責任を自覚し、自ら考え、自主活動ができるようにする。 １学期 研修会 ２学期 研究授業 夏季小中合同の研修会の実施	○ 自分も人も大切にし、他者を思いやり理解しようとする心を育む。 ○ 掃除など日々の活動を大切にし、何事にも協力して取組む姿勢を育む。 ○ 自ら考えて行動し、自らの行動に責任を持つ態度を育む。	○目標を持ち、自分で判断、実行し、責任を持つ。 ○礼儀の意義を理解し、感謝と思いやりの心をもつ。 ○生命を尊重する。 ○役割と責任を自覚し、公正公平で差別偏見のない学校をめざす。
健康・体力の増進	基礎体力の向上	○ 全授業で集団行動を行う。 ・規律を大切にした集団行動。その中で集団(チーム)作り。 ○ 体力・筋力の向上を意識した授業を行う。 ・全学年統一した体力・筋力向上に向けた補強運動を毎時間行う。 ・授業での運動量の確保。 ○ 体育的行事の充実。 ・生徒の自主活動を行う。	○ 全授業で集団行動を徹底。 ・個の役割をはっきりさせることで集団行動につなげる。 ・全学年集団行動、作りを徹底。 ○ 授業で体力に合わせた体力・筋力の向上を行う。 ・体力の向上に合わせたトレーニングを行う。 ・授業での運動量、運動強度の確保。 ○ 生徒主体の体育的行事の充実。 ・体育委員(リーダー)の育成により、生徒主体で行事を行う。	○ 生徒主体での集団行動を徹底。 ・生徒主体の集団行動を行う。その中で集団作りを意識する。 ・リーダーの育成を行う。 ○ 授業で体力に合わせた体力・筋力の向上を行う。 ・体力の向上に合わせたトレーニングを行う。 ・授業での運動量、運動強度の確保。 ○ 生徒主体の体育的行事の充実。 ・体育委員(リーダー)の育成により、生徒主体で行事を行う。 ・その中で生涯スポーツへとつなげていく。
支 援 教 育 の 充 実				

2 今年度の結果と取組みについて

（1）全国学力・学習状況調査

○● 国語 ●○

国 語A

（領域ごと）

①話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった。
②書くこと	概ね良好な結果であった。
③読むこと	概ね良好な結果であった。
④言語事項	概ね良好な結果であった。

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった。
②短答式	概ね良好な結果であった。
③記述式	出題なし

（無解答率） 概ね良好な結果であった。

（その他）

本校の特徴的なことについて

・最も正答率の高かった設問は「漢字を読む」問題で、どちらも95％以上の正答率であったが、無解答率は全国平均を上回っていた。次いで高かったものは「慣用句の意味を理解する」問題であった。

・最も正答率の低かった設問は「目的に応じて文の成分の順序や照応、構成を考えて書いているものを選択する」設問で、無解答率も全国平均に比べ高かった。

・無解答率の高かった設問は「漢字を書く」問題であった。

国 語B

（領域ごと）

①話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった。
②書くこと	概ね良好な結果であった。
③読むこと	概ね良好な結果であった。
④言語事項	概ね良好な結果であった。

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった。
②短答式	出題なし
③記述式	概ね良好な結果であった。

（無解答率） 概ね良好な結果であった。

（その他）

本校の特徴的なことについて

・最も正答率の高かった設問は「話の展開に注意して聞き、必要に応じて質問する」記述式の問題、次いで「質問の意図を捉える」問題であった。

・最も正答率の低かった設問は、「目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く」問題で、次いで「文章とグラフの関係を考えながら内容を捉える」問題だったが、無解答率は低かった。

分 析

1．全体的な傾向及び全国との比較

国語Aに比べて、Bの方が良好な結果であった。また全国平均を上回っているものは短答式や記述式の問題が多かった。B問題において正答率が最も低かった設問においては全国平均を一番高く上回っていた。しかし、正答率の高かった設問は全国平均を下回っていることから学力高位層は実力があるが、学力中間の層の学力が全国に比べて課題がみられることがわかる。

2．分析に対する課題

知識の定着に課題が見られ、漢字を書く力に欠け、文章中の意味を正確に読み取れていない等の語彙の少なさが見られる。そのことが文章や設問の意図、選択肢の内容を細部まで正確に読み取れないことに繋がっている。逆に記述式の設問においては、自己の言葉を用いて表現ができていると考えられる。

3．国語についての意識・授業での重点的な取組み

著しく正答率の低い設問については、無解答率も高いがそれ以外は全国平均と大きく差の開いたものも少なく、無解答率1パーセント以下がA問題においては半分以上、B問題では3分の2であった。このことから問題に取り組む意欲の高さがわかる。

日常生活の中で用いる語彙の少なさが、言語事項、言語活動、読む力に起因していると考えられる。今後授業において、語句を正確な読み取るための言語活動及び細部の表現まで深く読み取り捉え、それを正しい語彙を用いて表現していく表現活動を工夫していくことが必要である。また、毎時間「考えて書く活動」に取り組んでいるが、根拠を明確に表現した説得力のある文章になるよう構成等を深く考えて表現することを大切に取り組ませたい。また多くの優れた文章に触れられるように読書活動を推進していく取組みを充実させたい。

○● 数学 ●○

数　学A

（領域ごと）

①数と式	やや課題が残る結果であった。
②図形	概ね良好な結果であった。
③関数	概ね良好な結果であった。
④資料の活用	概ね良好な結果であった。

（問題形式）

①選択式	概ね良好な結果であった。
②短答式	やや課題が残る結果であった。
③記述式	出題なし
（無解答率）	概ね良好な結果であった。

（その他）

- 全国平均との差で、もっとも正答率が高かった分野は「資料の活用」で、全国平均とほぼ同じくらいである。また、「相対度数の変化の様子について，正しい記述を選ぶ」問題は全国平均を上回った。
- 全国平均との差で、もっとも正答率が低かった分野は「数と式」である。また、「絶対値の意味を理解している」問題は全国平均を大きく下回り、無解答率も高かった。

数　学B

（領域ごと）

①数と式	概ね良好な結果であった。
②図形	概ね良好な結果であった。
③関数	やや課題が残る結果であった。
④資料の活用	概ね良好な結果であった。

（問題形式）

①選択式	やや課題が残る結果であった。
②短答式	概ね良好な結果であった。
③記述式	概ね良好な結果であった。
（無解答率）	概ね良好な結果であった。

（その他）

- もっとも正答率が高かった設問は「グラフから必要な情報を読み取り，事象を数学的に解釈することができる」問題である。無解答率が低いのは「証明を振り返り，証明した事柄を基にして，新たな性質を見いだすことができる」問題である。
- もっとも正答率が低かった設問は「与えられた情報から必要な情報を選択し，的確に処理することができる」問題である。同問題は無解答率も高い。
- 全体的に正答率が全国平均を下回っている問題が多い。

分　析

1．全体的な傾向及び全国との比較

全体の平均正答率は昨年度より高くなったが、まだやや課題の残る結果となった。観点別では、A問題の「資料の活用」については、大差がなく標準と考えてよい。A問題の「数と式」「図形」「関数」はやや課題があり、B問題の観点別では「関数」がやや課題があった。

2．分析に対する課題

全国平均との差で、数学A「数と式」分野の正答率が課題があった。これは1，2年生の基本的な計算が定着していないと考えられる。計算力が定着していないため、他の分野にも影響していると考えられる。

3．数学についての意識・授業での重点的な取組み

「数学が好き」な生徒は5割程度いる。これは、「数学の勉強は大切だと思う」（7割）「授業はよくわかる」（6割）と回答している生徒が起因している。しかし、その学習を生活の中で生かそうとする意識（4割）は乏しいが、「解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考える」（6割）「できるようになりたい」（9割）「数学が将来役に立つ」（7割）と、意欲的に数学を学ぼうとする割合が比較的大きいと考えられる。

○●理科●○

（分野ごと）

① 物理的領域
概ね良好な結果であった。

② 化学的領域
やや課題が残る結果であった。

③ 生物的領域
概ね良好な結果であった。

④ 地学的領域
やや課題が残る結果であった。

（問題形式）

① 選択式
概ね良好な結果であった。

② 短答式
概ね良好な結果であった。

③ 記述式
やや課題が残る結果であった。

（無解答率）
概ね良好な結果であった。

（その他）

- もっとも正答率の高かった設問
  生物的領域　2(2)　活用
- もっとも正答率の低かった設問
  生物的領域　9(2)　活用
- もっとも無解答率の高かった設問
  化学的領域　8(3)　活用　生物学的領域　9(2)　活用
- もっとも無解答率の低かった設問
  物理学的領域　1(1)　活用
  生物学的領域　2(1)　活用
  地学的領域　3(1)　活用
  化学的領域　4(1)　知識

分析

正答率が低い問題であっても，分からないなりに答えを選ぶという意欲は感じられた。

正答率については，全国の正答率が 9 割を超える問題については全国平均を上回っていたが，そのほかの問題では，上回っていた問題もあったもののほとんどが全国平均を下回っていた。このことは，本当に基礎的なことがかろうじて定着しているが，それ以外の知識や活用についてはほとんど身についていないことを物語っている。

記述式に関する部分で，やや課題が残る結果となった原因は，生徒が出題の意図を理解できていない，自分の言葉で表現をする訓練がなされていない，文章を正しく書く力が不足しているなどが考えられる。これらのことを鑑み，問題の書かれている内容をしっかり理解し，イメージ化でき，アウトプットできるように反復する必要があると思われる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

- ４テストの正答率は、平成２４と２８年度が上がっているが、これらの年度のみ特に高く、平成１９年度から見ると、ほぼ横ばい状態と考えることができる。
- 教科別では、今年度は全教科上がっている、特に国語Ｂは大きく上がっている。ただ一昨年度が急に上がり昨年度の落ち込みが急だったためである。全体としては、横ばい状態で伸び悩んでいると判断すべきだろう。
- 無解答率は今年度はやや減少した。平成１９年度から見てみると減少傾向にある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- 学力高位層は昨年度は大きく減少したが、今年度はやや増加し、持ち直している。ただ、現時点では、横ばい状態と判断すべきだろう。
- 学力低位層は昨年度大きく増加したが、今年度はやや減少した。昨年度の分析では、全体として横ばい状態か増加傾向があるか今年度に委ねるとしたが、今年度の結果から見るとやや増加傾向にあると捉えるべきだろぅ。
- エンパワー層は平成２４,２５年度に大きく減少したが、その後は増加傾向になっている。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

（１） 基礎学力の定着

① テスト１週間前からの「総合的な学習・学活の時間」の活用
- 学力低位層、特にエンパワー層を底上げする取組みを行う。
- 二者懇談会を実施し、家庭学習の定着化を図る取組みを行う。（自主勉強帳の活用）

② 定期的に基礎学力に関する小テストを実施
- 国語は漢字、語句に関する小テスト、数学は計算問題の小テストを授業の最初に行う。
- 小テストで一定の基準に達していない生徒を集めた学習会を行う。

③ 長期休業中の学習会の実施
- 国語、数学を中心に取り組む。学力低位層の中でも、より厳しい生徒に焦点を当てる。

④ 幼稚園・小学校からの家庭学習の継続と家庭学習の大切さについての保護者の啓発活動を行う。

（２）既習事項の定着

① 「資料の活用」「反比例」などの１年次のみの学習事項の定着（数学科）
- ２，３年次に、今までの学習内容を振り返る時間を作る。

② 定期考査の活用（数学科）
- 前もって生徒達に出題する単元を予告し、既習事項の復習をさせ、テストの内容に織り込む。

③ 言葉を使って「書く」力を伸ばす取組み（国語科）
- 表現の課題を設定し、記述活動に取り組む姿勢を育てる。

（３）授業方法・内容の工夫と改善

① 分割授業の推進(数学科) … 学習サポーターの入り込み
- 全学年で行っている習熟度別の分割授業をより早い時期から実施する。今年度は一学期から実施。

② ペア学習やグループ学習の定着（ユニバーサルデザインを取り入れた授業）
- グループやペアでの学びを組織し、「学びあい」を定着させる授業方法を研究・実践していく。

③ ＩＣＴを活用した授業やビデオを使って授業を振り返る。

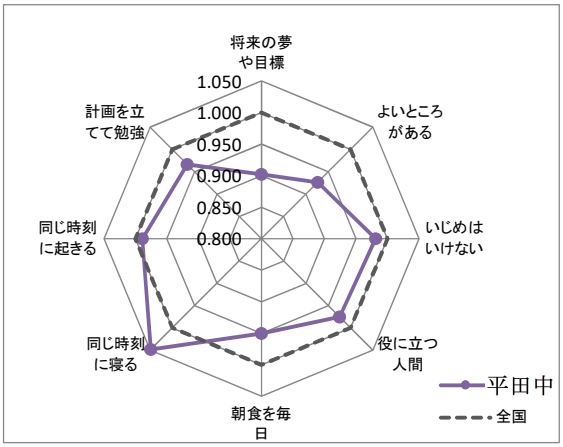
（４）学校全体としての取組み

① 朝の帯時間の活用 … 読書タイムとして設定する。テスト一週間前は朝学の時間とする。

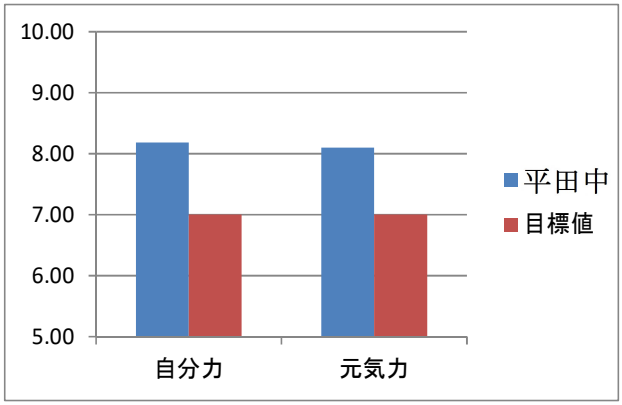
② 学校時程の見直し … テスト前などに小テストなどを行う時間を設定できる時程を検討していく。

○●子どもたちに育みたい力●○

５つの力 全国平均との比較



５つの力 目標値との比較



今年度は質問紙項目が大幅に変更になったため、５つの力をこれまでどおり算出することができませんでした。
そのため、全国平均との比較(レーダーチャート)は８項目、目標値との比較(棒グラフ)は、３項目とも実施した『自分力』と元気力』のみとなっています。

分析

1．自分力について

『いじめはいけない』『役に立つ人間になりたい』の数値はおおむね良好だが、『自分にはよいところがある』に関しては全国平均を大きく下回っている。自己肯定感や「自分は他から存在を認められている、大切にされている」という感じ方（自尊感情）が低いように思われる。

2．元気力について

『朝食を毎日食べている』の数値が全国平均を下回っているものの、残りの項目の数値は、おおむね良好である。家庭科の授業では『食育』にも力を入れ、元気力の底上げを図っている。

3．その他（「つながり力」以外の力について）

『将来の夢や目標をもてますか』の項目に課題がある。道徳教育や職業体験学習などを通じて働くことの意義を学び、夢や希望を実現しようとする意欲的な態度を育んでいきたい。

取組み

1．自分力について

自己肯定感が高まると、他者への見方も肯定的になり、「他者に対する関心と愛着と信頼感」を抱くことができる。そのためにも、教師が生徒を褒める場面を設定しながら、自分の良さに気づくような活動を意図的に取り入れていく。例えば、討論等の場を設定し、自分の考えを友だちに伝えたり、友だちの考えを聞きながら学び合ったりする活動を積極的に取り入れ、自分の良さや友だちの良さを気づかせる学習活動を行っていく。

2．元気力について

食育については、家庭科教諭や養護教諭が中心となって保健師など関係機関との連携により進んでいるが、睡眠も食と相互に密接に関連しており、睡眠に関する教育も合わせて行うことで元気力の底上げを図りたい。

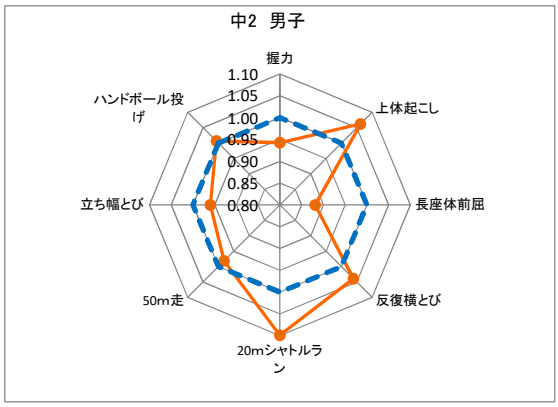
3．その他（「つながり力」以外の力について）

『計画を立てて勉強する』の値が低い。生徒一人ひとりが自主的に計画を立てて学習に向き合えるように各教科で帯学習等を継続して行い、教師は教室で落ち着いて学習できる環境づくりに取り組み、生徒には自主的に学習する力を育んでいく。

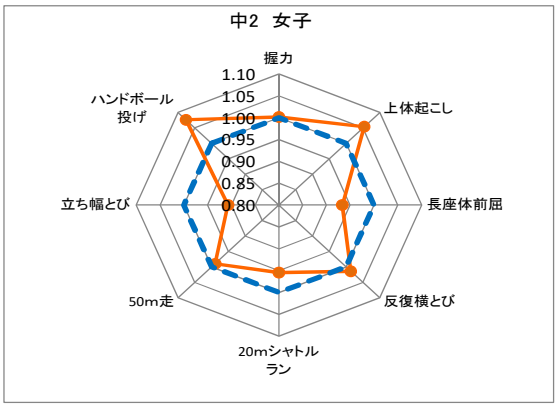
（2）全国体力・運動能力、生活習慣調査

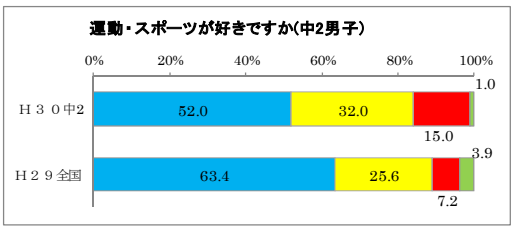
○●体力●○

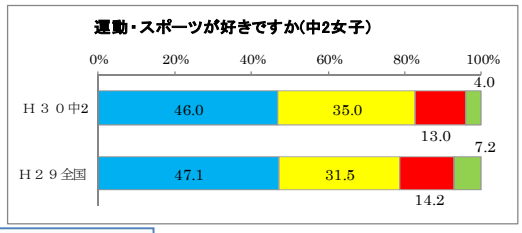
男子（中2）



女子（中2）







好き　やや好き　ややきらい　きらい

分析

1．男子 について

一昨年度までは、どの項目も全国平均を超える種目はなかったが、今年度も、４つの種目で平均を超えた。特にシャトルランの伸長は著しい。スポーツテストに限らず、準備運動でのランニングなど、保健体育に対する学習する態度が大きく向上していることを意味している。ただ、立ち幅とび・握力・長座体前屈の３種目は昨年度と同様に課題を残す結果となっている。

2．女子について

昨年度は全国平均を超える種目は３種目だった。今年度も上体起こしに加えて、ハンドボール投げが大きく平均を超え、反復横跳びと５０ｍ走はほぼ全国平均と同じである。１年当初より継続している補強運動の成果が出ている。しかし、昨年度は大きく平均を超えていたシャトルランが下がったのは課題である。

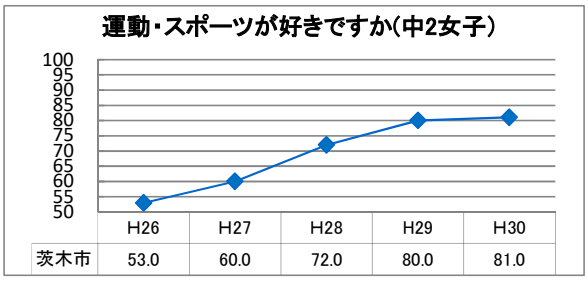
今年度の女子も、運動することが『大切・やや大切』と答えた割合が９０％、運動をすることが『好き・やや好き』という割合が８０％と、運動することに対する抵抗は少ないことが見うけられる。

取組み

授業の中で、全学年を通じて補強運動を取り入れている現状を維持し、その内容をより工夫していく必要がある。特に、上記で述べた課題を解決する意味でも、柔軟運動・ジャンプ力や女子については持久走を向上させる補強運動を強化していきたい。

今まで「投げる能力の低さ」は大きな課題だった。

球技の授業で工夫したり、小学校との連携を活用し、球技を楽しめるよう向上に努めた結果、今回の結果となった。今後も取組みを継続したい。



右のグラフは中２女子の運動・スポーツに関する意識アンケートの一つである。年々好きになっている生徒が増えているのが分かる。運動・スポーツに興味がある生徒は増えている中、実際に活動できていない生徒もみられるので、授業での運動への出会いを大切に、生涯スポーツへとつなげていきたい。